

お地蔵様とお盆

まだまだ暑い日々が続きますが、もうすぐお盆も過ぎて、地蔵盆がやってきます。お地蔵様は、たくさんのお地蔵さまたちの中で、最も親しみやすいお地蔵さまかも知れません。道端におられる石のお地蔵さまが、子供たちのおとぎ話によく登場するのも、なにかしら、お地蔵様が他のお地蔵様と違うところを表わしているのかも知れません。「地蔵」という名も、梵語ではクシテイ・ガルバといい、クシテイは大地、ガルバは胎・子宮の意で包蔵を意味するので地蔵と訳します。またそれは、大地の徳を表わすとされており、お地蔵様は、お釈迦様が入滅された後、弥勒菩薩が次の仏陀と成つてこの世に姿を現わされるまで、五十六億七千万年の間、無仏の五濁悪世の救済を仏にゆだねられており、地獄をはじめ六道を巡り、閻魔様以下様々に姿をかえて人々を救うといわれます。お地蔵様のお姿が、菩薩でありながら宝珠・錫杖を持つお坊さんの姿であるのもそのためです。

お地蔵様はいろいろなところにまつられておられますが、お堂以外のところの、お地蔵様が立たれる場所は六道の入り口とされるのです。インターチェンジそばの共同墓地には、入り口近くに六地蔵様がおられます。これはまさにあの世とこの世との境界に立たれているのです。また、町内の辻に立たれておられるのも、昔、村の入り口に立たれていたことの名残でもあります。

入り口といえば、あの世の入り口は賽の河原と言われます。賽の河原で子供たちを救うお地蔵様は、子供の守り神として、子安地蔵や安産の仏としても信仰されており、そのことからお盆の最後の行事である地蔵盆の主役が子供たちなのです。

お地蔵様といえは、安倉には地蔵寺があり、小浜には首地蔵がまつられていて有名ですが、この松林寺にもお地蔵様はおられます。ふだんは本堂の右の脇壇におまつりしてありますが、お施餓鬼には五如来様とともに外陣の施餓鬼壇におまつりします。このお地蔵様は比較的大きなお姿で、優しそうな顔をしておいでですが、近づいて下の方から拝むとすべてをお見通しになっておられるかのような非常に厳しい目でこちらをご覧になつておいで、思わずどきつとします。だから、真心をこめて拝まずにはおられない気持ちになることができますが、わけのわからなかつた子供の頃の私にとつてには最もこわい仏様でした。

お施餓鬼の折にお気付きになられたかと思ひますが、このお地蔵様も古くなられてきましたので、去年の暮れからこの春にかけてお修理させていたいただきました。まだ、彩色がかなり残つていたおかげで、ほほもとどおりのお姿に戻つていただくことができました。その際明らかになりましたことは、お地蔵様の衣の下に、つまり彩色の下の木地に墨で沢山の戒名が書かれていたことです。寄進者が供養したい人の戒名を直接お地蔵様のお身体に書いていたのです。今回もそのまま上から彩色を施し、それらの戒名は衣の下にしまわれております。ところで、これらの戒名はみなさんの古い御先祖様たちなので、考えれば、みなさんに最も身近なお地蔵様はこのお地蔵様かも知れません。

お地蔵様がお修理からお帰りになつてすぐ、長男が生まれました。お地蔵様は心なしかいつもより優しいお顔でご覧になつてくださつた気がしました。